

(6) 教職課程

人間学研究科子ども人間学専攻では、**幼稚園教諭専修免許状授与の所要資格**を取得できる教職課程を設置しています。

本専攻で免許状授与の所要資格を取得するためには、原則として学士の学位を有し、幼稚園教諭一種免許状を取得している上で本専攻の課程を修了し、かつ、教育職員免許法及び教育職員免許法施行規則に定める所要の単位を修得しなければなりません。

本専攻における教職課程の開設科目は、教科に関する科目、教職に関する科目に区分し、下表のとおり開設する授業科目の中から合計 24 単位以上修得する必要があります。

免許法施行規則に定める科目区分	左記に対応する開設授業科目					履修方法
	授業科目名 (専門科目子ども人間学領域)	履修区分	配当学年	開講期	単位数	
教科に関する科目	子どもとアート論	選択	1・2年	前期	2	左記14科目より 12科目24単位 以上選択履修
	子どもとことば論	選択	1・2年	後期	2	
教職に関する科目	学び学特論	選択	1・2年	前期	2	
	保育学特論	選択	1・2年	前期	2	
	子ども思想史特論	選択	1・2年	前期	2	
	保育実践研究	選択	1・2年	後期	2	
	保育者特論	選択	1・2年	前期	2	
	子ども・子育て支援実践研究	選択	1・2年	後期	2	
	家族社会学特論	選択	1・2年	後期	2	
	子ども政策特論	選択	1・2年	後期	2	
	教育学特殊研究	選択	1・2年	後期	2	
	子ども環境学特論	選択	1・2年	前期	2	
	発達心理学特論	選択	1・2年	前期	2	
	保育・教育課程研究	選択	1・2年	後期	2	

上記のほか、教職課程の履修に関する事は、巻末の教職課程履修規程を参照してください。

シラバス

(科目名 50 音順)

科目名	家族社会学特論	副題	
担当者	小玉 亮子		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	アリエスの研究を嚆矢として家族社会学のパラダイム転換がなされ、家族が歴史的構築物であることが認識されるようになり、近代以降子どもに対する家族と学校の影響力は歴史的に未だかつてないほど強力なものとなったことがあきらかにされてきた。この家族と学校がその機能を十分に果たし得ないときのために、近代国家は福祉システムを整備してきたが、このシステムは同時に家族と学校の子どもへの影響力をますます増大させるという結果をもたらした。近代における家族・学校・福祉のトリアーデの成立のプロセスと問題点を理解し、その中心に位置するものとして、幼児教育・保育施設の課題を考察する。		
授業のねらい・到達目標	近代家族と近代学校の成立を概観し、現代社会における福祉国家システムの成立の意味を理解する。 このことによって、現代の家族が単独の存在としてあるのではなく、学校を中心とする教育システムと児童相談所等の福祉システムと相互依存的に存立していることを学び、また、これらの結節点にある幼児教育の課題を考える。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション — 家族社会学のパラダイム転換とは何か		
2	自然の開発と人間の発達		
3	家庭や地域社会における子どもの生活と大人の生活		
4	近代家族における子どもの位置		
5	近代学校の成立とその特質		
6	近代学校における児童中心主義思想 — 幼児教育の誕生		
7	近代学校における懲戒の思想と in loco parentis		
8	社会問題化する子ども（1）貧困		
9	社会問題化する子ども（2）児童労働と労働者家族		
10	社会問題化する子ども（3）非行少年と家族問題		
11	女性のための教育福祉専門職システムの整備 — 幼児教育の制度化		
12	就学と就学前の接合か、分断か — 学校教育体系と幼児教育		
13	社会政策の展開と子ども		
14	消費社会のなかの家族と学校		
15	グローバリゼーションのなかの家族のゆくえ		
期末			
授業に関する連絡	多様なメディアが「家族」をどのようにとりあつかっているのかを社会的言説として捉え直すこと。その際、特に、映像作品から示唆をえることができる。たとえば、イスラム圏のドキュメンタリーやインドなど南アジアの映画などが有益となる。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポートおよび各回の研究発表を基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	事前に参考文献を読み、その内容を要約するなどしておくこと。 授業後には、各自の問題意識に沿ったまとめを行うこと。		
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探求心を持って授業に参加すること。		
テキスト	特に使用せず。		
参考文献	アリエス（1980）『子どもの誕生』みすず書房 ドンズロ（1991）『家族に介入する社会』新曜社 カニンガム（2013）『概説 子ども観の社会史』新曜社		

【予備学習ガイド】

科目名	家族社会学特論
担当者	小玉 亮子
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	<p>家族について学ぼうとするときに、ともすれば、自分の育ってきた家族を暗黙のうちに想定し、そこから家族に関する議論を組み立てがちになる。家族社会学において求められることは、まず、自らの家族概念の相対化であり、そのためには、比較の視点が有効となる。過去と現在、日本とヨーロッパといったように、時間的な比較・空間的な比較をおこなうことで、異質な文化や異質な社会に出会い、自らの相対化を行うことができる。まずは、時間的な比較を手がかりとして、現代家族との違いを理解しておくこと。</p>
文献リスト	<p>①落合恵美子（2004）『21世紀家族へ—家族の戦後体制の見かた 超えかた』有斐閣</p> <p>②木村涼子・小玉亮子（2005）『教育/家族とジェンダーで語れば』白澤社</p> <p>③広井多鶴子・小玉亮子（2010）『現代の親子問題—なぜ親と子が問題なのか』日本図書センター</p>
その他履修に必要な学習	<p>多様なメディアが「家族」をどのようにとりあつかっているのかを社会的言説として捉え直すこと。その際、特に、映像作品から示唆をえることができる。たとえば、イスラム圏のドキュメンタリーやインドなど南アジアの映画などが有益となる。</p>

科目名	教育学特殊研究	副題	
担当者	生田 久美子		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>これまで「教育」の世界では、「知識」と「技能」は独自の領域としてみなされ、教育実践もその解釈にのっとり、「知識教育」と「技能教育」は別個の教育として進められてきた。しかし、20世紀半ばから現在に至る「哲学」及び「認知科学」における研究は人間の「知識」が「技能」を含みこむ事象であることを解き明かしている。本講では、学部で学修した教員養成に関わる必修科目である「教育原理」を基礎にして、人間の営みとしての「教育」という行為が一体何かを、「知識」と「技能」の関係性を深く吟味することを通して、さらに考察を深めていく。上記の考察の手掛かりとして、『「わざ」から知る』を講読する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 教育における「知識」と「技能」とは何かを理解する。 2. 「知識教育」と「技能教育」の関係性について理解する。 3. 教育という営みを「知識」と「技能」の関係性を踏まえて、捉え直すことができる。 		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション：「教育学特殊研究」で目指すこと		
2	人間における「知識」とは何か		
3	人間における「技能」とは何か		
4	「知識教育」と「技能教育」はどのように理解及び実践されてきたか		
5	従来の教育における「知識」と「技能」についての捉え方の問題性を探る		
6	「技能」の教育実践から「知識」と「技能」の関係性を考える		
7	「知識」の教育実践から「知識」と「技能」の関係性を考える		
8	『「わざ」から知る』を読み、そこから教育における「知識」と「技能」の関係性を探る		
9	『「わざ」から知る』の輪読①－「わざ」の習得とは何を修得することか		
10	『「わざ」から知る』の輪読②－「形」より入りて「形」より出る		
11	『「わざ」から知る』の輪読③－「わざ」の世界への潜入		
12	『「わざ」から知る』の輪読④－「わざ」言語の役割		
13	『「わざ」から知る』の輪読⑤－「わざ」から見た「知識」		
14	教育という営みを、「知識」と「技能」の関係性の観点からあらためて考える		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	本授業では前半は主に講義形式、後半は演習形式での授業を行う。演習では、履修生にレジュメ作成の担当を課する。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート（50%）及び発表（50%）を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をしてから授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	生田久美子 『「わざ」から知る』 東京大学出版会 2007 生田久美子、北村勝朗編著、『わざ言語—感覚の共有を通しての学びへ』、慶応義塾大学出版会、2011年		
参考文献	西岡常一 『木のいのち木のこころ(天)』、草思社、1993年 小川三夫 『木のいのち木のこころ(地)』、草思社、1993年 J. レイブ&E. ウェンガー 1991 “Situated Learning : Legitimate peripheral participation”. Cambridge University Press. [佐伯胖（訳）『状況に埋め込まれた学習』産業図書、1993年] I. シェフラー 1979 “Conditions of Knowledge”. Chicago University Press.		

【予備学習ガイド】

科目名	教育学特殊研究
担当者	生田 久美子
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「教育学特殊研究」の授業を履修するために、「教育学」の基礎文献を読み、理解しておくこと。
文献リスト	<p>①藤田英典 『教育学入門（子どもと教育）』、岩波書店、1997年</p> <p>②村井実 『教育学入門 上下』、講談社、1983年</p> <p>③中内敏夫 『教育学第一歩』、岩波書店、1988年</p> <p>④田中・今井 『キーワード 現代の教育学』、東京大学出版会、2009年</p> <p>⑤プラトン著、藤沢訳『国家』、岩波書店、1979年</p> <p>⑥J. ルソー著、今野訳『エミール』、岩波書店、1962年</p> <p>⑦I. シェフラー著、村井実監訳、生田他訳『教育のことば—その哲学的分析』、東洋館出版社、1981年</p>
その他履修に必要な学習	現代社会における「教育」をめぐる課題に関して、ニュース等のメディアを通して情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科目名	子ども・子育て支援実践研究	副題	
担当者	矢萩 恭子		
開講期	後期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	我が国の子ども・子育てに対する施策は、2015年4月より施行される「子ども・子育て支援新制度」に至るまで、少子化対策、仕事と子育ての両立支援、ワークライフバランスの実現へ向けた法整備、フルタイム・ファースト（子どもの最善の利益）の理念に基づく全ての子どもの健やかな発達を支える子育て環境の整備等を経て、今まさに転換期を迎えている。本演習では、その現状と課題について、一方では、国内の社会状況および子育て・子育て環境や施策の実際を詳察し、これらの変遷および新制度の現状を検証する。他方では、海外の先進的な施策と比較することにより、多様な施策および支援事業の内実に関して実践的な分析を行う。また、乳幼児理解・保護者理解を基盤とする支援者の専門性について、発達過程や障碍に関する理解、カウンセリングや相談支援を含めた各専門機関ならびに地域社会との連携のあり方を考えると同時に、「子ども人間学」の視点から、子ども・子育てという営みを通じた人間学的な機能および役割という側面を各受講者が実践的に追究していくことを目指す。		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 我が国の子ども・子育て支援施策の変遷および現状について理解する。 2. 現代社会の子ども・子育て環境やその実際について研究的な問題意識をもつようになる。 3. 海外における施策や実践との比較から、我が国の子ども・子育て支援制度の内実について実践的に分析する視点を身につける。 4. 支援者の専門性について、発達過程や障碍に関する理解や、カウンセリング・相談支援等の各専門機関・地域社会との連携を考えると同時に、人間学的視野からその機能と役割について追究する。 		
授業の方法・授業計画			
1	授業オリエンテーション（ガイダンスおよび課題研究要領）		
2	就学前の子どもの育ちの現状（1）文献検討		
3	就学前の子どもの育ちの現状（2）事例検討		
4	就学前教育・保育施設における子育て支援機能		
5	我が国の子ども・子育て支援施策の変遷ならびに現状		
6	就学前教育・保育施設における実践事例検討（1）幼稚園・保育所		
7	就学前教育・保育施設における実践事例検討（2）認定こども園		
8	保育者および支援者に求められる専門性（1）発達過程や障碍に関する理解		
9	保育者および支援者に求められる専門性（2）地域社会や専門機関との連携		
10	海外の就学前教育・保育施設における実践事例検討（1）保育者と保護者の関係性		
11	海外の就学前教育・保育施設における実践事例検討（2）保護者同士の関係性		
12	保育者および支援者の養成とその課題		
13	課題研究の発表と討議（1）運営体制と機能的役割について考える		
14	課題研究の発表と討議（2）保育者・支援者の役割について考える		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	でんでんばんを通して連絡をする。		
評価方法及び評価基準	毎回の討議への貢献度（20%）、課題研究発表（60%）、まとめレポート（20%）を総合して評価する。		
事前・事後学習の内容	新制度の動向および実施・実践の実態について、国や基礎自治体に関する情報収集および整理を常に行うこと。また、毎回の授業内容を研究資料の一環として、各自の課題研究を進めること。		
履修上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ・ 課題発表のために授業時間外でのフィールド調査を必要とする。そのテーマおよび方法については計画の事前提出を求めるが、方法については、履修者の実現可能な調査方法を考慮する。 ・ 「児童家庭福祉特論」（前期）や「子ども政策特論」（後期）、「家族社会学特論」（後期）などとの同時履修を推奨する。 		
テキスト	配付資料を中心に進める。		
参考文献	文部科学省『幼稚園における子育て支援活動及び預かり保育の事例集』2009年 鯨岡峻『子どもは育てられて育つ』慶應義塾大学出版会、2011年 ミルトン・メイヤー『ケアの本質 生きることの意味』ゆみる出版、1987年 ほか適宜配付・紹介する。		

【予備学習ガイド】

科目名	子ども・子育て支援実践研究
担当者	矢萩 恭子
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	<p>保育、子育て・子育ち、子育て支援などにかかわる文献を読み学んでおくこと。また、文部科学省や厚生労働省の子どもや子育てに関する報告書や白書等の公表資料や文献を調べておくことを勧める。</p>
文献リスト	<ul style="list-style-type: none"> ①内閣府『少子化社会対策白書 平成24年版』勝美印刷, 2012年 ②全国保育団体連絡会保育研究所『保育白書 2013年版』ちいさいなかま社, 2013年 ③日本子どもを守る会『子ども白書2013』本の泉社, 2013年 ④汐見稔幸編『子育て支援の潮流と課題』ぎょうせい, 2008年 ⑤原田正文『子育ての変貌と次世代育成支援』名古屋大学出版会, 2008年 ⑥大日向雅美『母性神話の罫』日本評論社, 2000年 ⑦池本美香『失われる子育ての時間』勁草書房, 2003年 ⑧子育て支援プロジェクト研究会『子育て支援の理論と実践』ミネルヴァ書房, 2013年 ⑨大豆生田啓友『支え合い、育ち合いの子育て支援』関東学院大学出版会, 2006年 ⑩橋本好市・直島正樹編著『保育実践に求められるソーシャルワーク』ミネルヴァ書房, 2012年 ⑪石川洋子編『子育て支援カウンセリング』図書文化, 2008年 ⑫無藤隆・安藤智子編『子育て支援の心理学』有斐閣コンパクト, ⑬新澤誠治・今井和子『家庭との連携と子育て支援』ミネルヴァ書房, 2000年 ⑭鯨岡峻『<育てられる者>から<育てる者>へ』NHKブックス, 2002年 ⑮金田利子編著『育てられている時代に育てることを学ぶ』新読書社, 2003年 ⑯鯨岡峻『子どもは育てられて育つ』慶応義塾大学出版会, 2011年
その他履修に必要な学習	<p>現代の日本における子ども・子育てや保育を取り巻く問題についての情報の収集（特に、文部科学省・厚生労働省のホームページにある公表資料など）に努めて、自分自身の問題意識をもち、課題認識すること。</p>

科目名	子ども環境学特論	副題	
担当者	仙田 考		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>現在の幼稚園教育の基本理念である「環境を通しての保育」の意義と在り方、またその実践について学ぶために、子どもと環境との関係、特に子どもと環境との相互関係に着目し、その発達過程と育成に必要な環境のあり方を論ずる。その際、今日の子どもたちを取り巻く環境の激変が、未来を担う子どもたちに与える影響を考察し、その課題を整理した上で、子どもの豊かな発達を支える保育環境や子どもに活力を与える社会環境の構築に必要な要素を検討する。子どもの視点から見た環境の捉え直しを横断的・学際的に検討する。また幼稚園等の保育現場を訪れ、保育の方法や実践について考える機会も持つ。</p> <p>子ども環境学とは何かからはじめ、とくに子どもの遊び環境を中心的に取り上げながら、遊び空間の在り方、住まいの問題、安全な環境づくり、幼児教育施設、学校、医療環境、児童館・環境学習施設などの地域施設の現状などについて検討を進める。その上で、子どものための、子育てがしやすい街・都市づくりの在り方を展望し、子どもや子育て家庭を支える保育・教育実践のあり方を幅広い視点から考える。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>学生が、子どもがひと・もの・空間などさまざまな環境と関わる活動や子どもや子育てのための環境について、座学とともに、関連分野の専門家の話や、幼稚園等の保育現場の見学等を通して、子どもと環境との関係や、子どもの発達に寄与する環境のあり方を理解し、子どもや子育てにとってよりよい環境とはなにかを、学び考えることを目標とする。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	子ども環境学とは何か － 幼稚園教育における「環境を通しての保育」とは		
2	子どものあそび環境 － 時間、空間、集団、方法～遊環構造		
3	子どものための安全環境 － あそび環境におけるリスクとハザード		
4	子どもと保育環境（1） － 幼稚園、保育園、認定こども園の園舎環境		
5	子どもと保育環境（2） － 幼稚園、保育園、認定こども園の園庭環境		
6	子どもと学校環境 － 小学校環境と幼保小連携の可能性		
7	子どもの感性を育む環境 － 保育実践におけるアート、表現と環境		
8	子どもと癒しの環境 － 自然等の癒し環境		
9	障害を持つ子どもと環境 － 障害を持つ子どもの支援環境		
10	子どもの地域施設環境 － 園外保育施設の環境		
11	子どもと環境学習 － 環境への気づきから持続発展教育へ		
12	子どものための都市・街づくり － 子どもにやさしい街の在り方に向けて		
13	幼児教育施設等の視察（1） － 認定こども園：園舎、園庭		
14	幼児教育施設等の視察（2） － 幼稚園：園舎		
15	幼児教育施設等の視察（3） － 幼稚園：園庭遊具、ビオトープ		
期末			
授業に関する連絡	でんでんばんを通して連絡をする。		
評価方法及び評価基準	各授業での発表（50%）及びレポート（50%）を総合的に判断し評価する。		
事前・事後学習の内容	児童館や公園など子どもの施設に足を運んで、実際のこども施設がどのように作られ、使われている状況などを観察しながら、年齢や都市環境に応じどのようにあるべきかを考察してほしい。		
履修上の注意	各自の問題意識に基づいて授業での討論や視察に積極的に参加すること。		
テキスト	特に使用せず。		
参考文献	仙田満『子どもとあそび』岩波新書、1992年／仙田満・藤塚光政『幼児のための環境デザイン』世界文化社、2003年／仙田満『環境デザインの方法』彰国社、1998年／仙田満『環境デザインの展開』鹿島出版会、2002年／仙田満『環境デザイン講義』彰国社、2006年		

【予備学習ガイド】

科目名	子ども環境学特論
担当者	仙田 考
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「子ども環境学特論」の講義履修に際し、子どもの環境についての関連文献を読み、理解を深めること。
文献リスト	<ul style="list-style-type: none">①仙田満「子どもとあそび」岩波新書 1992年②仙田満「こどものあそび環境」鹿島出版会 2009年③仙田満「幼児のための環境デザイン」世界文化社 2003年④仙田満「環境デザインの方法」彰国社 1998年⑤仙田満「環境デザインの展開」鹿島出版会 2002年⑥森上史朗編著「これからの保育環境づくり」世界文化社 1999年⑦住宅総合研究財団住教育委員会編著「まちはこどものワンダーランド」風土社⑧英国教育科学省編 IPA日本支部訳「アウトドアクラスルーム」公害対策技術同友会 1994年⑨吉永元孝ほか編「園芸療法のすすめ」創森社 1998年⑩門脇厚司「子どもの社会力」岩波新書 1999年
その他履修に必要な学習	児童館や公園など子どもの施設に足を運んで、実際のこども施設がどのように作られ、使われている状況などを観察しながら、年齢や都市環境に応じたものようにあるべきかを考察してほしい。

科目名	子ども思想史特論	副題	
担当者	石橋 哲成		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>「子ども」という存在は、教育思想史の中でどのように捉えられていたのであろうか。本講では、ヨーロッパ中世における子ども観を最初に取り上げ、その後ルネッサンス期を経て、近世において子どもがどのように捉え直されるようになったのかを見ていく。今日の子ども観の先駆けとなったのは、ルソーであった。ルソーが「子どもの発見者」と言われる所以である。その後ルソーの影響を強く受けた、ペスタロッチー、さらに「幼稚園」の創立者となったフレーベルや「子どもの家」を創立したモンテッソーリが現れた。それぞれがどのような境遇の中で、どのような子ども観を獲得していったのかを考察する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. ヨーロッパ中世の子ども観はどのようなものであり、それに対して、ルソー、ペスタロッチー、フレーベル、モンテッソーリは、どのような子ども観を獲得していったのかを理解する。 2. その理解の上に立って、受講者各自も自らの子ども観を確固たるものにしていくこと。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション ― 子ども思想史を学ぶ意味		
2	ヨーロッパ中世における人間観・子ども観		
3	ルネッサンス期における人間観・子ども観		
4	近世における子ども観の概観		
5	ルソーにおける子ども観の成立過程		
6	ルソーにおける子ども観と教育観		
7	ペスタロッチーにおける子ども観の成立過程		
8	ペスタロッチーにおける子ども観と教育観		
9	フレーベルにおける子ども観の成立過程		
10	フレーベルにおける子ども観と教育観		
11	モンテッソーリにおける子ども観の成立過程		
12	モンテッソーリにおける子ども観と教育観		
13	研究発表①：子ども観・教育観と幼児教育		
14	研究発表②：子ども思想史と幼児教育		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	授業は講義形式で行う。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する数回の小レポート（50%）及び研究発表（50%）を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	授業内の議論に対する積極的な参加を求める。		
テキスト	事前に授業資料を配布する。		
参考文献	ルソー著/今野一雄訳『エミール（上）』/岩波書店/2012（第80刷） ペスタロッチー著/前原・石橋共訳『ゲルトルート教育法・シュタンツ便り』/玉川大学出版部 フレーベル著/小原國芳訳『人の教育』（『フレーベル全集第2巻』）/玉川大学出版部 モンテッソーリ著/阿部・白川共訳『モンテッソーリ・メソッド』/明治図書/1977		

【予備学習ガイド】

科目名	子ども思想史特論
担当者	石橋 哲成
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	<p>「子ども思想史特論」の授業においては、ヨーロッパ中世における子ども観を最初に取り上げ、その後ルネッサンス期を経て、近世において子どもがどのように捉え直されるようになったのかを見ていく予定である。この授業を履修するためには、ヨーロッパの歴史を概観し、とりわけ近世における子ども思想に関する文献を読み、基本的な理解をしておくことが要求される。</p>
文献リスト	<p>①皇至道著『西洋教育通史』／玉川大学出版部／1978</p> <p>②岩崎次男他著『西洋教育思想史』／明治図書／1987</p> <p>③コメンスキー著藤田輝夫訳『母親学校の指針』玉川大学出版部1986β</p> <p>④ルソー著／今野一雄訳『エミール（上）』／岩波文庫／2012（第80刷）</p> <p>⑤ペスタロッチー著／前原・石橋共訳『ゲルトルート教育法・シュタンツ便り』／玉川大学出版部／1987</p> <p>⑥荘司雅子著『フレーベルの生涯と思想』／玉川大学出版部／1975</p> <p>⑦ハイラント著／平野・井出共訳『マリア・モンテッソーリ』／東信堂／1995</p>
その他履修に必要な学習	<p>自分が子どもと接する時、子どもをどのような存在として捉え、どのような言葉掛けをしているのかを振り返ると同時に、電車の中やバスの中、あるいは公園等で、親たちが子どもたちにどのような言葉かけをしたり、どのような扱いをしているのかを観察して、自分自身の授業に対する問題意識を持つこと。</p>

科目名	子ども政策特論	副題	
担当者	渡邊 英則		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	平成27年度から国の子どもや子育てに関する制度が大きく変わる。これまで縦割り行政で分かれていた幼稚園と保育所を、幼保連携型認定こども園という一つの制度としていく動きもこの制度改革の大きな柱である。また少子化対策や待機児童対策、地方分権、子育て支援の充実など、教育・保育施策全体を、国や地方の子ども・子育て会議の中で、地域の実態に合わせたものにしていこうとする動きも活発である。このような社会の動きや制度改革を見据えながら、実践する側の立場から、ではどのように園を運営し、どのように教育や保育を行っていけばいいかを探求していくことにする。		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 制度が大きく変わるときに問われるのは理念である。新たにできる制度は子どもを本当に大事にする社会を実現しようとする制度となっているのか、園や保育者はどんな子どもを育てようとしていて、その営みを支える制度となっているのか等について、保育の実態も踏まえながら様々な視点から検討ができる力を養う。 2. 理念を具体的な実践として実現していく方法や考え方を獲得していく。 		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス		
2	子ども・子育て支援新制度について ～制度ができるまでの流れを中心に～		
3	子ども・子育て支援新制度について ～新たな制度がめざす方向とは～		
4	教育と保育との関係		
5	幼稚園制度の基本的な考え方と課題		
6	保育園制度の基本的な考え方と課題		
7	認定こども園制度について（1）～制度と仕組み～		
8	認定こども園制度について（2）～実際の保育を中心に～		
9	認定こども園制度について（3）～認定こども園保育要領を読み解く～		
10	子育て支援について		
11	幼保小連携について		
12	特別支援教育について		
13	海外の保育制度について		
14	実践を深めていくために必要な視点とは何か		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では履修生にレジユメの作成の担当を課す。		
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議（50%）、期末課題（50%）を基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	授業の展開過程で適宜参考文献を紹介するため、できるかぎりそれらを事前に読んで授業へ臨むこと。また、授業後は振り返りを十分にして自分の考えを整理すること。		
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探求心を持って、授業内の議論にも積極的に参加すること。		
テキスト	『保育白書2013』 ひとなる書房、全国保育団体連絡会・保育研究所編（※その年度の最新のものを使用する）		
参考文献	佐伯胖ほか著『こどもを「人間としてみる」ということ』 ミネルヴァ書房、2013年 マーガレット・カー著、大宮勇雄・鈴木佐喜子訳『子どもの学びをアセスメントする』 ひとなる書房、2013年 吉田正幸ほか著『次世代の保育のかたち』 フレーベル館、2010年		

【予備学習ガイド】

科目名	子ども政策特論
担当者	渡邊 英則
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「子ども政策特論」の授業を履修するために、内閣府で開催されている子ども・子育て会議の資料や、認定こども園、幼稚園、保育園の制度や保育方法・内容について、ある程度理解しておくことが望ましい。
文献リスト	<p>①池本美香『失われる子育ての時間—少子化社会脱出への道』勁草書房、2003年</p> <p>②仙田満『子どもとあそび—環境建築家の眼—』岩波新書、1992年</p> <p>③佐伯胖『幼児教育へのいざない—円熟した保育者になるために—（増補改訂版）』東京大学出版会、2014年</p> <p>④森上史朗編『幼児教育への招待—いま子どもと保育が面白い』ミネルヴァ書房、1998年</p> <p>⑤藤原和博『つなげる力』文春文庫、2010年</p> <p>⑥河合隼雄『Q&Aこころの子育て—誕生から思春期までの48章』朝日文庫、2001年</p> <p>⑦高杉自子『子どもとともにある保育の原点』ミネルヴァ書房、2006年</p>
その他履修に必要な学習	現代社会における「子ども」や「保育」を取り巻く問題について情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科目名	子どもとアート論	副題	
担当者	安村 清美・中原 篤徳・斉木 美紀子 (オムニバス・一部共同)		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>子どもの育ちを見通した時、アートに潜む創造的経験のプロセスに、実践的学びとしての意味を見出すことができる。人間としての子ども期のアート経験が、その育ちにもたらす意味、特に保育現場におけるすべての子どものためのアート教育の可能性について、個別のアートの独自性及びトータルな識見をもてるよう理論と実践を往還しながら研究する。</p> <p>安村担当の講義では、舞踊家と教育現場の関わりと実践を通して、アートとして舞踊がもつ教育的意味について考察する。また、表現する身体について、身体を通して表現し人と共振することとは何か、その意味について芸術教育に関わる文献と事例を合わせて探究する。</p> <p>中原担当の講義では、塑造の実践と彫刻理論の研究を通じ、アート制作の持つ教育的な意味を考察していく。</p> <p>また、斉木担当の講義では、音楽表現の視座から子どもの表現を捉え、表現する主体としての自分についても探求しながら、アート教育についての理解を深めていく。</p> <p>その上で、担当者共同による講義では、子どもがアートに出会い経験することの意味について、上記の内容から個々の学生の学びを基にプレゼンテーション及びディスカッションを行う。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 幼児期の子どもにとって、アートと出会い経験することがもたらす意味について、実践記録や研究を通して多様な視点から考察できるようになる。</p> <p>2. 幼児期のアート経験の特徴として、その総合性に着目し、保育者としての総合的なプランニング力、実践力を修得する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	「子どもとアート」について (人間としての子ども期のアート経験の意味) (安村)		
2	教育現場と舞踊家の関わりと実践①—子どもの育ちに関わる意味と可能性について (安村)		
3	教育現場と舞踊家の関わりと実践②—共振する身体：子どもの身体表現とコミュニケーションの意味 (安村)		
4	表現する身体：保育現場における子どもの身体とアート—実践記録を読む (安村)		
5	子どもと彫刻 (中原)		
6	子どもの塑造①：塑造の素材、道具 (中原)		
7	子どもの塑造②—頭像の制作—心棒から粘土付けまで (中原)		
8	子どもの塑造③—頭像の制作—仕上げ・講評 (中原)		
9	声①様々な声の表現 (斉木)		
10	声②子どもの声を考える (斉木)		
11	音①様々な音を探す (斉木)		
12	音②子どもと楽器について考える (斉木)		
13	課題についてのディスカッション (安村・中原・斉木)		
14	課題のプレゼンテーション (安村・中原・斉木)		
15	まとめと講評 (安村・中原・斉木)		
期末			
授業に関する連絡	本授業では内容に応じ講義形式、演習形式で授業を行う。実践を含む演習では、履修生に実践課題を課することがある。		
評価方法及び評価基準	小レポート (30%)、実践課題 (30%)、プレゼンテーション (40%) を基に総合的に判断する。		
事前・事後学習の内容	事前学習として、自分自身が経験し、また保育現場で出会ったアート教育の課題を考える。さまざまなアートに親しみ、関心をもつ。事後学習として、各回の学習内容をまとめ、次回授業の課題準備につなげる。		
履修上の注意	実践を含む授業なので、指示に留意し、実践に適した服装で授業に臨むこと。		
テキスト	「子どもたちの創造力を育む—アート教育の思想と実践」佐藤、今井編、2003東京大学出版会		
参考文献	<p>「松本千代栄撰集 2 人間発達と表現」舞踊文化と教育研究の会 (編者代表：安村) 編、2007、明治図書</p> <p>『彫刻をつくる—新技法シリーズ』建畠覚造編、1965、美術出版社</p> <p>『表現者として育つ』佐伯、藤田、佐藤編、1995、東京大学出版会</p>		

【予備学習ガイド】

科目名	子どもとアート論
担当者	安村 清美・中原 篤徳・斉木 美紀子（オムニバス・一部共同）
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの表現やアート教育について自ら関心を持ち、積極的に実際の保育現場や社会文化としてのアートに触れる機会を作ること。 ・子どもが何かを創り出すときの、発想・技術・プロセス・作品の関係について考えること。
文献リスト	<ul style="list-style-type: none"> ①『芸術の意味』ハーバート・リード滝口修造訳 みすず書房 1990 ②『幼児期—子どもは世界をどうつかむか』岡本夏木 岩波新書 2005 ③『遊びと人間』ロジェ・カイヨワ 講談社 1990 ④『遊びの発達学 基礎編』高橋、中沢、森上共編 倍風館 1996 ⑤『遊びの発達学 展開編』高橋、中沢、森上共編 倍風館 1996 ⑥『遊びとわらべうた—子どもの文化の見直し』永田栄一 青木書店 1982 ⑦『子どもは美をどう体験するか』K.モレンハウアー 玉川大学出版部 2001 ⑧『子どもの表現を見る、育てる』今川、宇佐美、志民編 文化書房博文社 2005 ⑨『音楽する子どもをつかまえない』小川、今川編 ふくろう出版 2008 ⑩『美学事典』竹内敏雄編 弘文堂 1966 ⑪『彫刻の美』本郷新 中央公論美術出版 2005 ⑫『彫刻をつくる』建畠覚造、佐藤忠良他 美術出版 1965 ⑬『触ることからはじめよう』佐藤忠良 講談社 1997
その他履修に必要な学習	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが何かを創り出すときの、発想・技術・プロセス・作品の関係について、上記文献リストの購読や子どもと共にある実践を通して考えること。

科目名	子どもとことば論	副題	多文化共生時代の子どもとことば		
担当者	内藤 知美				
開講期	後期	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>子どもの総合的発達におけることばの問題について、0歳から就学前までの時期の子どものことばの発達過程とことばの獲得に関わる社会・文化環境について理解を深める。家庭、幼稚園、保育所などの生活における子どものことばに関わる様々な事例を用い、子どもの生活や遊びと大人—子ども関係、子ども同士の関係がことばの発達にどのように相互に影響するのかを検討する。また子どもを取り巻く社会・文化環境の変化、例えば乳幼児期からの視聴覚メディアの受容、日本語を母語としない子どもの増加、言葉の関わりのもちにくい子どもの問題など、子どもとことばを取り巻く今日的課題を捉える視点をもつことが目標である。また児童文化財を含めた「モノ」を有効に活用し、実際の保育において子どものことばを育てる保育者としての実践力を獲得する。</p>				
授業のねらい・到達目標	<p>1. 子どもとことばの関係性について、社会・文化的視点から広く理解を深める。 2. ことばをめぐる最新の理論に触れると同時に、具体的事例を通して、現代社会に生きる子どもことばの発達を捉え、支援する具体的、実践的方法を学ぶ。</p>				
授業の方法・授業計画					
1	子どもとことばの関係性				
2	子どもとことばをめぐる社会環境・文化環境				
3	ことばの発達と保育（0歳期）				
4	ことばの発達と保育（1語発話の時期）				
5	ことばの発達と保育（2語発話の時期）				
6	ことばの発達と保育（2歳期・3歳期）				
7	ことばの発達と保育（4歳期・5歳期）				
8	ことばでの関わりのもちにくい子どもの援助①—多文化・多言語と子ども				
9	ことばでの関わりのもちにくい子どもの援助②—ことばとコミュニケーション（ビデオカンファレンスを通して）				
10	事例検討：同調、リズムとことば				
11	事例検討：共感性とことば				
12	事例検討：創造性や思考とことば				
13	ことばを育てる児童文化財の活用①—絵本などの文化財が育むことば（実践的演習も含む）				
14	ことばを育てる児童文化財の活用②—文化財を用いたことばの育ちあい（実践的演習も含む）				
15	子どものことばと視聴覚メディア				
期末	多文化共生時代を生きる子どもとことば（小論文）				
授業に関する連絡	個別のメール及び、でんでんばんを通して連絡をする。				
評価方法及び評価基準	小論文（レポート）70%、児童文化財の実演・発表 30%				
事前・事後学習の内容	子どもとことばの発達をめぐる最新の理論、研究を随時紹介するので、関連する資料を熟読すること				
履修上の注意	保育事例検討では受講生が自ら考え、積極的に発言することを望む。また「子ども」や「言葉」に関する関連文献を読み、学びを深めることを期待する。				
テキスト	幼稚園教育要領（文部科学省）、幼稚園教育要領解説書（文部科学省）、保育所保育指針解説書（厚生労働省）				
参考文献	岡本夏木『子どもとことば』（岩波新書1982）、麻生武『身ぶりからことばへ』（新曜社1992） 青木保『異文化理解』（岩波新書 2001）、佐伯胖『共感』（ミネルヴァ書房 2007）、今井むつみ『ことばと思考』（岩波新書2010）など授業中に適宜指示する。				

【予備学習ガイド】

科目名	子どもとことば論
担当者	内藤 知美
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	<ul style="list-style-type: none"> ・「子どもとことば論」の授業を履修するために、「ことばの発達」に関する基礎理論を深めておくこと。 ・保育におけることばの発達を促す環境・文化を理解するために、保育現場でのフィールドワークを行い、実践的理解を深めること。 ・絵本などの児童文化財作品の実演を通して、子どもとの双方向のコミュニケーションのあり方について考えること。
文献リスト	<ol style="list-style-type: none"> ①岡本夏木『子どもとことば』（岩波新書 1982） ②やまだようこ『ことばの前のことば』（新曜社 1987） ③内田伸子『子どもの文章』（東京大学出版会 1990） ④麻生武『身ぶりからことばへ』（新曜社 1992） ⑤浜田寿美男『意味から言葉へ』（ミネルヴァ書房 1995） ⑥青木保『異文化理解』（岩波新書 2001） ⑦正高信男『子どもはことばをからだで覚える—メロディから意味の世界へ』（中公新書 2001） ⑧岡本夏木『幼児期—子どもは世界をどうつかむか』（岩波新書 2005） ⑨脇明子『読む力は生きる力』（岩波書店 2005） ⑩佐伯胖『共感—育ち合う保育のなかで—』（ミネルヴァ書房 2007） ⑪NPOブックスタート編著『赤ちゃん絵本をひらいたら—ブックスタートはじまりの10年』（岩波書店 2010） ⑫今井むつこ『ことばと思考』（岩波新書 2010） ⑬脇明子『子どもの育ちを支える絵本』（岩波書店 2011） ⑭世界とつながる子どもの本棚プロジェクト編『多文化に出会うブックガイド』（読書工房 2011）
その他履修に必要な学習	<p>子どもとことばの関係について、「多文化共生」の視点をもって、積極的にフィールドワークを行うこと。また絵本や紙芝居などの児童文化財について理解を深め実践力を育てるとともに子どもとことばを取り巻く文化のあり方について自ら考えること。</p>

科目名	発達心理学特論	副題	
担当者	大島 みずき		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	人間を理解するための一つの領域として、人の心の発達について取り上げる。特に人間の基盤を作る重要な時期である幼児期から児童期を中心とした心の発達に着目する。授業は学生の発表と、それに基づくディスカッションからなる。主に国内外の最新の発達心理学に関する研究論文を授業のテーマごとに担当の学生が発表し、それに対するディスカッションを担当教員を含めた受講者全員で行う。その際、発達心理学の研究がどのような形で実践に生きるかについても話し合い、検討していく。		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 心の発達に関わる様々な要因を理解し、教育の専門家として、新旧通した発達心理学についての深い学識を身につける。 2. 授業の中で、担当学生が発達心理学の最新の研究についての文献を発表し、研究論文を読む力を獲得する。 3. 紹介される論文を全員でディスカッションすることを通し、クリティカルに物事を捉える視点を獲得する。 4. 発達についての考え方や知識を保育・教育現場で自ら応用できる力を獲得する。 		
授業の方法・授業計画			
1	オリエンテーション(授業の進め方)		
2	心理学論文の読み方について		
3	論文の検索方法		
4	乳児期についての論文(愛着)の発表とディスカッション		
5	幼児期についての論文(認知)の発表とディスカッション		
6	幼児期についての論文(向社会的行動)の発表とディスカッション		
7	幼児期についての論文(社会的問題解決)の発表とディスカッション		
8	幼児期についての論文(仲間関係)の発表とディスカッション		
9	幼児期・児童期についての論文(小学校への移行)の発表とディスカッション		
10	児童期についての論文(認知)の発表とディスカッション		
11	児童期についての論文(仲間関係)の発表とディスカッション		
12	青年期についての論文の発表とディスカッション		
13	発達障害についての論文の発表とディスカッション		
14	保育者・教師と子どもの関係についての論文の発表とディスカッション		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	個別のメール及び、でんでんばんを通して連絡をする。		
評価方法及び評価基準	授業内での発表(50%)、及び課題の提出(50%)に基づいて評価する。		
事前・事後学習の内容	担当となる論文は熟読の上、発表の為の資料を作成すること。発表の担当ではない場合は、発表されるテーマについての発達心理学の基礎的な知識を事前に確認してから授業に望むこと。		
履修上の注意	発達心理学の基礎的な知識を持って授業に望むこと。授業内では積極的に発言することを求める。		
テキスト	特に使用せず。		
参考文献	H. R. ジャフアー 『子どもの養育に心理学がいえること』 新曜社 2007年 渡辺弥生・伊藤順子・杉村伸一郎(編)『原著で学ぶ社会性の発達』ナカニシヤ出版 2008年		

【予備学習ガイド】

科目名	発達心理学特論
担当者	大島 みずき
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	発達心理学，特に乳幼児期の心理の発達についての基礎的な知識を学習しておく必要がある。また，心理学論文を読む為の統計についての基礎的な知識も，授業に並行して身につけていくことが望ましい。
文献リスト	<p>①鎌原雅彦・宮下一博・大野木裕明・中澤潤 『心理学マニュアル 質問紙法』 北大路書房 1998年</p> <p>②J. B. クーパーシュミット・K. A. ダッジ 『「子どもの仲間関係」発達から援助へ』 北大路書房 2013年</p> <p>③中澤潤・大野木裕明・南博文 『心理学マニュアル 観察法』 北大路書房 1997年</p> <p>④H. R. シャファー 『子どもの養育に心理学がいえること』 新曜社 2007年</p> <p>⑤杉村伸一郎・坂田陽子(編) 『実験で学ぶ発達心理学』 新曜社 2004年</p> <p>⑥渡辺弥生・伊藤順子・杉村伸一郎(編) 『原著で学ぶ社会性の発達』 ナカニシヤ出版 2008年</p> <p>⑦山田剛史・村井潤一郎 『よくわかる心理統計』 ミネルヴァ書房 2004年</p>
その他履修に必要な学習	

科目名	保育・教育課程研究	副題	
担当者	宮里 暁美		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	一人一人の子どもの現状や課題を丁寧に見出し、次なる経験に繋がる保育の活動や環境をデザインしていく循環のプロセス等について、事例やDVDを通して検討する。また、子どもとの対話的な関係の中から「学びの経験（履歴）」を編み出していくために必要な視点について、文献と実践を通して検討する。さらに、国内外の特色のある保育・教育課程について分担して調べ発表する。その内容を検討し、特色や相違点、共通点を整理する。また、グループディスカッションや全体討議の場面を多く設定し、学びを深めていく。		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 幼児期の教育課程の特色について検討し、豊かな経験を生み出すための保育・教育課程を構成するポイントについて整理する。 2. 具体的な幼児の姿の背景に、保育・教育課程が存在していることを確認し、計画から保育へ、保育の省察から計画へ、という循環を支える営みについて明らかにする。 3. 遊びの中の学びに着目し、学びを生み出す、教育課程の編成方法を構想する。 		
授業の方法・授業計画			
1	講義	保育の基本と計画：カリキュラムとは何か	
2	講義	保育の基本と計画：保育・教育課程の意義	
3	講義	保育の基本と計画：遊びの中の学びを捉える	
4	ビデオカンファレンス	循環のプロセスの検討① 心身の健康に関する姿から	
5	ビデオカンファレンス	循環のプロセスの検討② 人とかかわる姿から	
6	ビデオカンファレンス	循環のプロセスの検討③ 身近な環境にかかわる姿から	
7	ビデオカンファレンス	循環のプロセスの検討④ 言葉のやりとりから	
8	ビデオカンファレンス	循環のプロセスの検討⑤ 表現する姿から	
9	討議	循環のプロセスを支える教師の援助と環境の在り方について	
10	討議	循環のプロセスを生み出す保育・教育課程の編成について	
11	発表	国内の特色ある保育・教育課程	
12	発表	国外の特色ある保育・教育課程	
13	討議	様々な保育・教育課程の違いと共通点から見たこと	
14	討議	豊かな経験を生み出す保育・教育課程の編成について	
15	講義	学びの振り返りとまとめ（課題レポート後日提出）	
期末			
授業に関する連絡	個別のメール及び、でんでんばんを通して連絡をする。		
評価方法及び評価基準	事例分析や討議への参加意欲：40% 資料準備及び提案内容：30% 課題レポート：30%		
事前・事後学習の内容	事前：特色ある保育・教育課程については、各自で資料を探し提案準備を行う 事後：授業内容を整理し、学びを深める。必要に応じて、資料整理を行う。		
履修上の注意	特になし		
テキスト	河邊貴子・赤石元子監修、東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎編集『今日から明日へつながる保育―体験の多様性・関連性をめざした保育の実践と理論―』萌文書林、2009年 大宮勇雄『学びの物語の保育実践』ひとなる書房、2010年 泉千勢・一見真理子・汐見稔幸編著『世界の幼児教育・保育改革と学力』明石書店、2008年		
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2008年、厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレーベル館、2008年、友定啓子・山口大学教育学部附属幼稚園編著『幼稚園で育つ―自由保育のおくりもの』ミネルヴァ書房、2002年		

【予備学習ガイド】

科 目 名	保育・教育課程研究
担 当 者	宮里 暁美
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「保育・教育課程研究」の授業を履修するために、保育学や保育実践にかかわる基礎文献を読み、理解しておくこと。
文献リスト	<p>①津守真・浜口順子編『新しく生きる—津守真と保育を語る—』フレーベル館，2009年</p> <p>②津守真『私が保育を志した頃』ななみ書房，2012年</p> <p>④津守真『保育の現在—学びの友と語る—』萌文書林，2013年</p> <p>⑤津守真『保育者の地平—私的体験から普遍に向けて—』ミネルヴァ書房，1997年</p> <p>⑥苅宿俊文・佐伯胖・高木光太郎『ワークショップとまなび1 まなびを学ぶ』東京大学出版会，2012年</p> <p>⑦苅宿俊文・佐伯胖・高木光太郎『ワークショップとまなび2 場づくりとしてのまなび』東京大学出版会，2012年</p> <p>⑧苅宿俊文・佐伯胖・高木光太郎『ワークショップとまなび3 まなびほぐしのデザイン』東京大学出版会，2012年</p> <p>⑨深澤直人『デザインの輪郭』TOTO出版，2008年</p> <p>⑩室田一樹『保育の場に子どもが自分を開くとき』ミネルヴァ書房，2013年</p> <p>⑪宮里暁美『子どもたちの四季』主婦の友社，2013年</p>
その他履修に必要な学習	現代社会における「子ども」や「保育」を取り巻く問題を把握するとともに、様々な保育実践の実際について情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科目名	保育学特論	副題	
担当者	高嶋 景子		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	従来の個体能力論的なアプローチから脱却し、多様で複雑な状況や文脈において生成される様々な人間の「学び」や「育ち」を、その状況や文脈との関係の中で捉えようとする理論的枠組みの変遷と展開について学び、「子ども人間学」的観点から、保育という営みにおける様々な「学び」や「育ち」（子ども、保護者、保育者等々の学びや育ち）を捉えるための視座について検討する。その上で、それらの「学び」や「育ち」を支える多層的なケアリング関係の構造や構築過程を分析し、より豊かな「学び」や「育ち」に繋がる保育実践の在り方を探究していくこととする。		
授業のねらい・到達目標	1. 子どもの「学び」や「育ち」を捉えるためのまなざしを改めて問い直すと同時に、それらの「学び」や「育ち」を支えるための保育実践の構造を読み解くため、具体的な実践事例の検討を行いつつ様々な視点を学ぶ。 2. 子どもを始め、その実践にかかわる多様な人々（保護者、実践者、研究者等々）の豊かな「学び」に繋がる資源が埋め込まれた保育の在り方を探究していくための問いの持ち方、考え方を獲得する。		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス		
2	関係や状況に埋め込まれた「学び」①～個体能力論から関係論的パラダイムへの転換～		
3	関係や状況に埋め込まれた「学び」②～社会文化的アプローチの理論と展開／正統的周辺参加論～		
4	実践共同体への参加過程としての「学び」①～スタンスの変容過程としての「学び」～		
5	実践共同体への参加過程としての「学び」②～参加を通して生まれる多様な他者（子ども・保護者・実践者）の変容過程～		
6	「学び」を支える実践における「対話」～「対話」が持つ多声性への着目～		
7	「学び」を支える「対話」が生まれる関係構造①～子どもの変容過程の実践事例を通して～		
8	「学び」を支える「対話」が生まれる関係構造②～保護者の変容過程の実践事例を通して～		
9	「学び」を支える「対話」が生まれる関係構造③～実践者の変容過程の実践事例を通して～		
10	子どもの多様な「学び」を支える実践者の専門性		
11	実践者の専門性の深まりを支える「学び合い」①～事例を通して読み解く「省察」の生成過程～		
12	実践者の専門性の深まりを支える「学び合い」②～「省察」を引き出す保育カンファレンスと対話的な場の構造～		
13	多様な「学び」の可能性が埋め込まれた保育の営みを読み解く実践研究①～文献検討～		
14	多様な「学び」の可能性が埋め込まれた保育の営みを読み解く実践研究②～各自の実践事例の検討～		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では、文献講読および実践事例を基にした討議のためのレジュメの作成の担当を課す。		
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議及びレジュメ作成（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	授業の展開過程で適宜参考文献を紹介するため、できるかぎりそれらを事前に読んで授業へ臨むこと。また、授業後は振り返りを十分に自分の考えを整理すること。		
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探究心を持って、授業内の議論にも積極的に参加すること。		
テキスト	佐伯胖・宮崎清孝・佐藤学・石黒広昭著『〔新装版〕心理学と教育実践の間で』東京大学出版会、2013年 佐伯胖編『共感—育ち合う保育のなかで—』ミネルヴァ書房、2007年		
参考文献	J. レイヴ&E. ウェンガー著、佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書、1993年 J. V. ワチ著、田島信元他訳『心の声—媒介された行為への社会文化的アプローチ—』福村出版、2004年		

【予備学習ガイド】

科目名	保育学特論
担当者	高嶋 景子
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「保育学特論」の授業を履修するために、子どもの「学び」や「育ち」について論じられた文献や、保育にかかわる基礎文献を読み、理解しておくこと。
文献リスト	<p>①佐伯胖『「学ぶ」ということの意味』岩波書店，1995年</p> <p>②佐伯胖『「わかる」ということの意味〔新版〕』岩波書店，1995年</p> <p>③佐伯胖『幼児教育へのいざない—円熟した保育者になるために—〔増補改訂版〕』東京大学④出版会，2014年</p> <p>⑤津守真『保育の一日とその周辺』フレーベル館，1989年</p> <p>⑥津守真『保育者の地平—私的体験から普遍に向けて—』ミネルヴァ書房，1997年</p> <p>⑦吉村真理子『保育者の「出番」を考える—今、求められる保育者の役割—』フレーベル館，2001年</p> <p>⑧浜田寿美男『発達心理学再考のための序説』ミネルヴァ書房，1993年</p> <p>⑨津守真・森上史朗編『倉橋惣三と現代保育』フレーベル館，2008年</p> <p>⑩高杉自子著子どもと保育総合研究所編『子どもとともにある保育の原点』ミネルヴァ書房，2006</p> <p>⑪高嶋景子・砂上史子・森上史朗編『子ども理解と援助』ミネルヴァ書房，2011年</p>
その他履修に必要な学習	現代社会における「子ども」や「保育」を取り巻く問題について情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科目名	保育実践研究	副題	
担当者	高嶋 景子		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	「保育」という営みを探究していくためには、その実践的課題を、個々の保育者や子どもの持つ「能力」や「技術」の問題としてではなく、その「実践」に関わる多様な他者やモノ、環境等との関係の中で多層的に捉える視座が必要となる。そのように多層的に保育の営みを捉えながら、「子ども人間学」的観点に立って、自らの実践を省察していくまなざしを獲得していくため、本授業では、一人一人の受講者が実践的な場におけるフィールドでの観察や自らの実践を通して得た事例を基に、そこから見出される課題を共有し、「質の高い実践」とは何か、その在り方や構造について検討し、探究していく。		
授業のねらい・到達目標	保育という営みにおける具体的な事例のなかから、そこで問われるべき実践的課題を抽出し（「問い」を見出し）、それらを周囲の多様な他者やモノ、環境等との関係の中で適切に「問う」ことのできる視座を獲得していくと同時に、その視座を基に、子どもの育ちやその育ちを支える保育の在りようについて探究していくことを目的とする。		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス		
2	「子どもをみる」ということ①～子どもをみるまなざしを規定する子ども観・発達観／自らの枠組みへの気づき～		
3	「子どもをみる」ということ②～「子どもを共感的にみる」ということの意味～		
4	「子どもをみる」ということ③～「子どもの育ちをみる」ということ／共感的理解を妨げるもの～		
5	実践事例研究Ⅰ①～各自の事例報告と討議：子どもを取り巻く関係構造への着目～		
6	実践事例研究Ⅰ②～各自の事例報告と討議：「気になる子」を生み出す関係構造～		
7	実践事例研究Ⅰ③～各自の事例報告と討議：子どもの「遊び」と仲間集団～		
8	実践事例研究Ⅰ④～各自の事例報告と討議：「遊び」を支える活動媒体としての「モノ」への着目～		
9	保育という営みを問い直す①～「ある」から「なる」を支える保育とは～		
10	保育という営みを問い直す②～「子どものケアする世界をケアする」ということの意味～		
11	実践事例研究Ⅱ①～各自の事例報告と討議：子どもを取り巻く実践共同体への着目～		
12	実践事例研究Ⅱ②～各自の事例報告と討議：保育の場における実践共同体の持つ多層性～		
13	実践事例研究Ⅱ③～各自の事例報告と討議：実践共同体の「境界」とその柔軟性の持つ意味～		
14	実践事例研究Ⅱ④～各自の事例報告と討議：子どもの育ちを支える保育者のまなざしと援助～		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習においては、受講者全員が、自らの観察事例もしくは実践事例と、その事例に対する考察の発表を行い、それらに対する討議を中心に授業を展開していく。		
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	授業において、実践的な場におけるフィールドでの観察、もしくは、自らの実践を通して得た事例、および、その事例に対する考察の発表を行うため、それらの事例の収集と検討を行うこと。また、授業後は、授業時の他の事例の発表や討議の振り返りを十分に行い、自分なりの考察を深めていくこと。		
履修上の注意	実践事例の収集のために保育現場での観察等が必要となる場合は、対象園の選定や依頼については、事前に授業担当教員へ相談すること。		
テキスト	岸井慶子著『見えてくる子どもの世界—ビデオ記録を通して保育の魅力を探る—』ミネルヴァ書房, 2013年 柴山真琴著『子どもエスノグラフィー入門—技法の基礎から活用まで—』新曜社, 2006年		
参考文献	子どもと保育総合研究所編佐伯胖他著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房, 2013年 鯨岡峻・鯨岡和子著『保育のためのエピソード記述入門』ミネルヴァ書房, 2007年 大宮勇雄著『学びの物語の保育実践』ひとなる書房, 2010年 河邊貴子著『保育記録の機能と役割—保育構想につながる「保育マップ型記録」の提言—』聖公会出版, 2013年		

【予備学習ガイド】

科目名	保育実践研究
担当者	高嶋 景子
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	「保育実践研究」の授業を履修するために、保育学や保育実践研究にかかわる基礎文献を読み、理解しておくこと。
文献リスト	<p>①佐伯胖『「学ぶ」ということの意味』岩波書店，1995年</p> <p>②佐伯胖『「わかる」ということの意味〔新版〕』岩波書店，1995年</p> <p>③佐伯胖『幼児教育へのいざない―円熟した保育者になるために―〔増補改訂版〕』東京大学出版会，2014年</p> <p>④津守真『保育の一日とその周辺』フレーベル館，1989年</p> <p>⑤津守真『保育者の地平―私的体験から普遍に向けて―』ミネルヴァ書房，1997年</p> <p>⑥吉村真理子『保育者の「出番」を考える―今、求められる保育者の役割―』フレーベル館，2001年</p> <p>⑦高嶋景子・砂上史子・森上史朗編『子ども理解と援助』ミネルヴァ書房，2011年</p> <p>⑧佐伯胖・汐見稔幸・佐藤学編『学校の再生をめざして①学校を問う』東京大学出版会，1993年</p> <p>⑨佐伯胖・藤田英典・佐藤学編『シリーズ学びと文化①学びへの誘い』東京大学出版会，1995年</p> <p>⑩佐伯胖・藤田英典・佐藤学編『シリーズ学びと文化⑥学び合う共同体』東京大学出版会，1996年</p>
その他履修に必要な学習	現代社会における「子ども」や「保育」を取り巻く問題について情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。

科目名	保育者特論	副題	
担当者	矢萩 恭子		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>保育実践の過程は、保育の場生きる主体である子どもと、同じ主体としての保育者との関係性において力動的に展開される生のありようそのものであるため、そのプロセスは外的基準や目標に照らして可視化することが難しい側面をもつ。また、保育における子どもと保育者との関係性は人間と人間との深い交流をその基盤としており、そこには「子ども人間学」としての保育観が存在する必要がある。一方、近年、保育の質と評価に関して、あるいは保育の質の向上に寄与する保育者の研修や実践研究のあり方に関して、国内外において活発な議論が展開されている。本講では、それらの研究動向として、ECEC (Early Childhood Education and Care)に関する経済協力開発機構 OECDの報告書およびそれに関連する国内の研究論文や著作等を取り上げながら、ニュージーランドにおけるECE (Early Childhood Education)のナショナル・カリキュラムに基づく実践と保育の場でのアセスメントの実際について解説し、質の高い実践力を備えた省察的実践家としての保育者の専門性について、人間学的考察に基づいた精査を試みる。そして、現代の社会状況から多様化する保育実践の場における保育職の意義や役割、職務内容などについての知識と思考を高度化していく。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 保育の質および評価、保育者の専門性に関する研究動向について理解する。 2. ニュージーランドにおけるECEのナショナル・カリキュラムの実践と評価に関する実践事例に即した検討を通じて、現状の保育を理論的かつ実践的に検討する力量を獲得する。 3. 保育者の研修および保育実践研究のあり方についての検討や討議などから、保育の質の向上に関する研究的視点を確立する。 		
授業の方法・授業計画			
1	授業オリエンテーション		
2	保育者の専門性に関する研究の動向① 国内(1) 歴史的変遷における動向		
3	保育者の専門性に関する研究の動向② 国内(2) 新制度下における動向		
4	保育者の専門性に関する研究の動向③ 海外(1) OECD報告における動向		
5	保育者の専門性に関する研究の動向④ 海外(2) OECD報告に関連する動向		
6	ニュージーランドECEにおける保育実践の検討① 一元化政策以前の状況		
7	ニュージーランドECEにおける保育実践の検討② 一元化政策とナショナル・カリキュラムの成立		
8	ニュージーランドECEにおける保育実践の検討③ ナショナル・カリキュラムの実践		
9	ニュージーランドECEにおける保育実践の検討④ ナショナル・カリキュラム実践の評価		
10	ニュージーランドECEにおける保育実践の検討⑤ 発達観・環境観・子ども理解と学びの振り返り		
11	ニュージーランドECEにおける保育実践の検討⑥ 日本における「学びの物語」の保育実践事例		
12	保育の質の向上に関する実践的方策の検討① 多様化する保育実践の場における保育職の意義と役割の再検討		
13	保育の質の向上に関する実践的方策の検討② 保育者の職務内容としての実践研究のあり方の検討		
14	保育の質の向上に関する実践的方策の検討③ 保育者養成と現職研修の架橋の可能性		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	履修者の学修および保育経験等を考慮しながら、毎回、テーマに関連する実践報告やそれについての討議を含め、理論と実践の往還を図ることとする。		
評価方法及び評価基準	毎回の討議への貢献度(20%)、期末レポート(80%)を総合して評価する。		
事前・事後学習の内容	参考資料や参考文献については、事前にその内容を確認しておくこと。 授業後には、各自の問題意識を追究したまとめを行うこと。(適宜発表・討議することとする。)		
履修上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ・平成20年3月改訂および改正の『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』の内容に関する基本的知識が必要である。 ・一部に英語参考文献や資料の講読を含むため、英和辞典を用意すること。 		
テキスト	マーガレット・カー, 大宮勇雄・鈴木佐喜子訳 『保育の場で子どもの学びをアセスメントする』 ひとなる書房, 2013 (Margaret Carr “Assesment in Early Childhood Settings” 2001) 『OECD保育白書 (“Starting Strong II” 2006)』 明石書店, 2011		
参考文献	“Weaving Te Whariki 2nd edition” edited by Joce Nuttall, NZCER PRESS, 2013 “National Evaluation Reports” Education Review Office, New Zealand “Starting Strong III” 2012, 大宮勇雄『保育の質を高める』 ひとなる書房, ほかに適宜配付・紹介する。		

【予備学習ガイド】

科 目 名	保育者特論
担 当 者	矢萩 恭子
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	保育者あるいは保育の質や専門性に関する研究的視点を醸成するために、遊び、発達、子ども理解、保育内容、保育記録、保育制度などに関する各領域の文献を学んでおくことが望ましい。
文献リスト	<ul style="list-style-type: none"> ①小川博久『遊び保育論』萌文書林, 2010年 ②麻生武+綿巻徹編『遊びという謎』ミネルヴァ書房, 1998年 ③西村清和『遊びの現象学』勁草書房, 1989年 ④木下孝司・加用文男・加藤義信編著『子どもの心的世界のゆらぎと発達』ミネルヴァ書房, 2011年 ⑤清水由紀・林創『他者とかかわる心の発達心理学』金子書房, 2012年 ⑥津守真『保育の一日とその周辺』フレーベル館, 1989年 ⑦津守真『保育者の地平—私的体験から普遍に向けて—』ミネルヴァ書房, 1997年 ⑧津守真・津守房江『出会いの保育学』ななみ書房, 2008年 ⑨加藤繁美『対話的保育カリキュラム(上)(下)』ひとなる書房, 2007年, 2008年 ⑩加藤繁美『対話と保育実践のフーガ』ひとなる書房, 2009年 ⑪大宮勇雄『保育の質を高める』ひとなる書房, 2006年 ⑫大宮勇雄『学びの物語の保育実践』ひとなる書房, 2010年 ⑬大場幸夫『こどもの傍らに在ることの意味』萌文書林, 2007年 ⑭中村雄二郎『臨床の知とは何か』岩波新書, 1992年 ⑮鯨岡峻・鯨岡和子『保育のためのエピソード記述入門』ミネルヴァ書房, 2007年 ⑯鯨岡峻『子どもの心の育ちをエピソードで描く』ミネルヴァ書房, 2013年 ⑰室田一樹『保育の場に子どもが自分を開くとき』ミネルヴァ書房, 2013年 ⑱今井和子『保育を変える記録の書き方評価のしかた』ひとなる書房, 2009年 ⑲吉田正幸編著『次世代の保育のかたち』フレーベル館, 2010年 ⑳松川由紀子『ニュージーランドの子育てに学ぶ』小学館, 2004年 ㉑泉千勢・一見真理子・汐見稔幸『世界の幼児教育・保育改革と学力』明石書店, 2008年
その他履修に必要な学習	現代の日本における保育や子どもを取り巻く問題についての情報の収集（特に、文部科学省・厚生労働省のホームページにある公表資料など）に努めて、自分自身の問題意識をもち、課題認識すること。同時に、世界の幼児教育の動向にも関心をもちつつ、我が国における保育者・保育の質の評価や向上に対する知識や考え方を身に付けていくこと。

科目名	学び学特論	副題	
担当者	佐伯 胖		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	いわゆる「学習」（動物を含めた生物の行動形成）についての心理学、すなわち学習心理学は、20世紀後半から数度にわたって大きな変革を経てきた。とくに、人間の学習は、過去の学習心理学と決別し、人間学の一領域として新しく生まれ変わり、発展してきている。そのきっかけを作った理論は、「正統的周辺参加論」とよばれている。講義では、この理論をさらに人間学的観点から発展させた「学び学」を提唱する。		
授業のねらい・到達目標	「学習」についての科学的研究は、長い間、行動主義心理学の考え方に支配されていたが、それへの根源的批判から、認知心理学、状況論を経て正統的周辺参加論に至っている。講義では、それらの経緯をたどり、人間学的観点からの「学び学」の考え方を習得することを目標とする。		
授業の方法・授業計画			
1	「学ぶ」とはどういうことか		
2	「勉強」の科学：行動主義心理学		
3	シンボルの歴史とコンピュータ教育		
4	苜宿実践：「教室にやってきた未来」		
5	マッキントッシュ思想とスティーブ・ジョブズ		
6	レッジョ・エミリアの教育思想		
7	「学び」の新しい科学：「学び」の認知科学		
8	正統的周辺参加論		
9	二つの特別支援学校の実践から		
10	「学びやすさ」のデザイン：アフォーダンス論		
11	学びのドーナツ論		
12	「共感」と学び		
13	ケアリングと学び		
14	「遊び」と学び		
15	「教える」ということの意味		
期末			
授業に関する連絡	毎回、最後の15分で授業についての質問、コメントを「リアクション・ペーパー」に書いて提出する。適切なコメントの場合など、次回の冒頭で取り上げる可能性がある。		
評価方法及び評価基準	講義の区切れ目で、レポートを提出する（50%）。講義の最後には講義全体を振り返ってのレポートを提出する（50%）。それらを基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	講義の展開過程で逐次、参考文献を紹介するので、できるかぎりそれらを事前に読むことが求められる。		
履修上の注意	全講義に出席のこと		
テキスト	J.レイヴ&E.ウエンガー著佐伯 胖訳『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書、1993年		
参考文献	佐伯 胖著『「学び」の構造』東洋館、1975年 佐伯 胖著『イメージ化による知識と学習』東洋館、1978年 佐伯胖ほか著『こどもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房、2013年		

【予備学習ガイド】

科 目 名	学び学特論
担 当 者	佐伯 胖
事前、あるいは並行して学ぶべき内容	下記文献リストのなかから、特に、事前に、『「学び」を問いつづけて』（佐伯胖著、小学館、2003年）を読んでおくことが望ましい。
文献リスト	<ul style="list-style-type: none"> ①佐伯胖著『「学び」の構造』 東洋館 1975年 ②佐伯胖著『「学ぶ」ということの意味』 岩波書店 1995年 ③佐伯胖著『「わかる」ということの意味 [新版]』 岩波書店 1995年 ④佐伯胖著『「学び」を問いつづけて』 小学館、2003年 ⑤佐伯胖著『「わかり方」の探究』 小学館、2004年 ⑥佐伯胖著『幼児教育へのいざない【増補改訂版】』 東京大学出版会、2014年 ⑦佐伯胖編著『共感ー育ち合う保育のなかでー』 ミネルヴァ書房、2007年 ⑧佐伯胖ほか著『こどもを「人間としてみる」ということ』 ミネルヴァ書房、2013年 ⑨ジーン・レイブ, エティエンヌ・ウエンガー著 佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習』 産業図書、1993年
その他履修に必要な学習	現代社会における「子ども」を取り巻く状況に関して、ニュース等のメディアを通して情報収集をするとともに、自分自身の問題意識を形成すること。